

JICSTでの研修を終えて

生田高紀

(株)日本鉄鋼協会事務局情報業務室

平成4年4月1日付で、技術室から情報業務室への転属とJICST((特)日本科学技術情報センター)での半年間(平成4年4月～9月)の研修を拝命した。

会社勤務のときに研究部門が長かったこともあって、JICSTの技術情報には深い関心があったし、大いに利用させていただき大変ありがたく思っていたが、これがどのように作り上げられているのかということについては正直なところあまり関心がなかった。



写真1 JICST(日本科学技術情報センター)

さて、いよいよ研修開始である！

「平成4年度JICST情報部新人研修」のJICSTおよび関連会社の対象者の方々に混じって、一般研修(4月、2日間)、専門研修(5月、10日間中の関係分5日間)を受講し、おおよその全体観はつかむことができた。印象深かった事柄の主なものをメモ的に以下に列挙する。

- 情報処理に当たっては、特に品質と速報性が重要である。
- JICSTは(科学技術庁管轄)、昭和32年8月、政策的に科学技術情報のデータベース化を推進すべく設立された。(欧米では民間で分野別に推進)

但し、一元化されているわけではなく、他に、文部省管轄のアカデミー(大学)対象の学術情報データベース<無料>、通産省管轄の特許情報データベースがある。

- 昭和51年9月、JOIS(JICST Online Information System; JICSTオンライン情報検索システム)による情報検索サービスが開始された。
- 年間処理件数(平成3年度)は、書誌登録件数約90万件(抄録無しの、速報性、幅広さを狙った書誌情報データベースで、JICST速報ファイルと称する)、抄録件数約60万件(文献情報データベースで、JICST科学技術文献ファイルと称する)である。なお、文献情報収録件数の総計は、昭和50年4月～平成4年1月現在で、約780万件である。
- 現在の職員数は、約400名(含、嘱託約100名)である。また、抄録作成を委託する登録抄録員数は、約3,000名である。
- 収集資料は、外国雑誌約8,500種、国内雑誌約7,700種、その他、技術レポート約12,500件、会議資料約400種、公共資料約5,000種、研究発表情報約300種であり、世界の50数ヶ国から収集している。(金属工学部門は、外国誌約200種、国内誌約100種が主体である)
- JICST科学技術文献ファイルにおける文献記事件数の国別および分野別比率は(平成3年度)、発行国別では、日本約32%、アメリカ約30%、イギリス約12%、オランダ約6%、ドイツ約6%、旧ソ連約5%、その他約9%であり、技術分野別では、生物科学・医学・薬学約19%、化学約17%、物理約15%、情報・管理システム約7%、機械約7%、電気約6%、土木・建築約5%、農学約5%、金属約5%、その他約14%である。

引続いて、本題の校閲・索引の実務研修に入る！

この中味は、ひとこと言え、抄録のチェックと検索キーとなるキーワードや分類コードの付与である。当然のことながら、JICST科学技術文献ファイルならびに情報検索システムのルールの枠の中で進めねばならない。各文献の主題分析を的確に行い、それに対応したキーを、正確に、十分に絞り込んで、首尾一貫して付与することがポイントである。さもないと、ユーザーの求めるものにヒットする確率が低い、即ち、適中率が悪いということになる。責任重大！ 悪戦苦闘の連続である！ 能力向上の道は、幅広

い知識吸収努力の継続と実地訓練の積み重ね以外にはないと感じている。一方、まだまだ偉そうなことが言えた義理ではないが、ここで、ひとこと苦言めいたお願いをさせていただくと、特に、予稿集の短報の場合であるが、その分野の専門家向けということに限らず、できれば素人にも知ってもらおうという姿勢での記述をお願いしたいものである。大切な用語が略号のみの記載で、完全な表記あるいは簡単な説明の注記がなかったり、文章がわかりにくかったりするものがときどき見受けられるが、そうすると抄録作成や索引作業の足を引張りかねないからである。

併行して、情報検索の研修も行った！

先ずは研修会を受講したが、JOIS研修会(7月、3日間)ならびにSTN(国際科学技術情報ネットワーク)研修会(7月、3日間)を一気に受講したので、頭の中がかなり混乱してしまった。実地訓練は、研修部署(情報部金属工学部門)にある端末が、JICST科学技術文献ファイル(収録期間1981年4月以降)にセットされているので、これについて行った。ある分野における文献収録件数の推移(これは、その分野の研究発表件数の動向を、傾向として充分表していると言える。一例として注目分野である粉末冶金関係のデータを図1に示すが、その急増振りが注目される!)や所要文献情報(処理の難しい文献の処理に際しての過去の類似文献の処理事例の参照にも利用できる)などの検索が、慣れれば比較的容易にできることがわかり、非常に有用であることをあらためて実感した。大いに活用したいものである。

今後の抱負についてひとこと！

これからの情報管理に携わる人は、資料の整理・保管、オンライン検索サービスといった従来の業務にとどまらず、これらを超えた活動が要求されるといわれている。また、情報の発信者たれともいわれている。かかる点を念頭において、鉄鋼技術情報センター運営委員会ははじめ関係者各位のご指導を賜りながら、主要分野あるいは注目分野の文献収録件数の推移(研究成果発表件数の推移→研究動向の目安となると言える)の調査報告、会議資料書誌データベース

スの軌道のせ、共同研究会資料管理のやり方を見直しならびに会員の皆様のご要望の調査・検討等にも(さらには、協会という中間的な立場の中での技術情報管理の在り方の追求についても)取り組んでいきたい、また、これらを通じて、会員の皆様によろこばれ、愛される、存在感のある技術情報センターづくりの一翼を担うべく、微力ながら頑張りたいものだと思っている次第である。

最後に、この長期間の研修を快くお引受下さり、身にあまご指導と諸々のお世話をいただきましたJICSTの情報部の長谷川部長殿、三浦主任情報員殿、佐藤副主任情報員殿をはじめ関係者の皆様に深く感謝の意を表します。

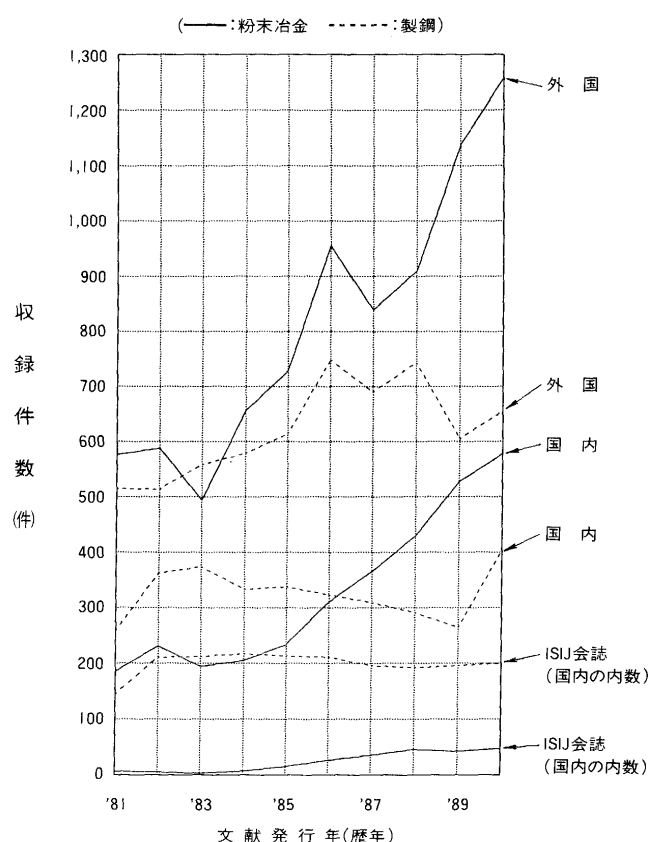


図1 JICST科学技術文献ファイルにおける粉末冶金関係文献収録件数の推移[1981年～1990年]
(比較のため製鋼関係文献のデータを併記した)